科目区分：専修別専門教育科目（美術）
授業科目名：西洋美術史

オンデマンド型における、通史を学ぶ意欲を高めるための授業展開

美術教育専修　上原真依

Ⅰ．授業の概要

「西洋美術史」は、学校教育教員養成課程2~4年生を対象とした、美術中等免許（一種）のための選択必修科目である。本年は、教育学部学校教育教員養成課程の小学校サブコース2名、中等教育コース美術教育専攻3名、他学部（社会共創学部・SSC生命科学工学コース）2名が受講した。

1)　授業目的
・西洋における各時代の美術の特色を理解し、文化背景を踏まえて考察することで、美術史の基本的な流れを把握できるようになる。

2)　到達目標
１．美術作品を的確に視る能力を高める。
２．西洋美術の基本的な流れを理解できるようになる。
３．作品の機能や制作当時の社会的・文化的背景など、観賞教育に必要な基礎的知識を獲得し、美術作品を歴史的背景との関連性から考察する術を身につける。

3)　関連するディプロマ・ポリシー
教育と教職に関する確かな知識と,得意とする分野の専門的知識を修得している。（知識・理解）
教育現場で生じているさまざまな現代的諸課題について，専門的な知見をもとに，その対応方策を理論に基づいて総合的に考え，その過程や結果を適切に表現することができる。（思考・判断・表現）

4)　今年度、特に意識して取り組んだこと
美術作品を正しく理解するには、まず本物を実際に見ることが重要である。作品を実見することは、作品の面白さに気づき、作品を積極的に読み取る姿勢を育む基本となる。実物を見て作品について考え調べる習慣を獲得すれば、授業時間外のみならず生涯にわたり美術作品を学習し続けられることは言うまでもない。そこで例年、本授業では、実作品を見ることへの関心を高めることを意識し、見学の機会を設け、その作品に関する解説を行うとともにワークシートを課すことで、西洋美術史作品への関心を高められるように工夫してきた。

しかし、2020年度は新型コロナウィルス感染拡大の影響から、見学実習を実施することが絶望的となった。また全授業がオンラインでの遠隔授業の形を取らざるを得なくなったため、ともすれば、単調な作品紹介や通史の説明に終わってしまいかねない。

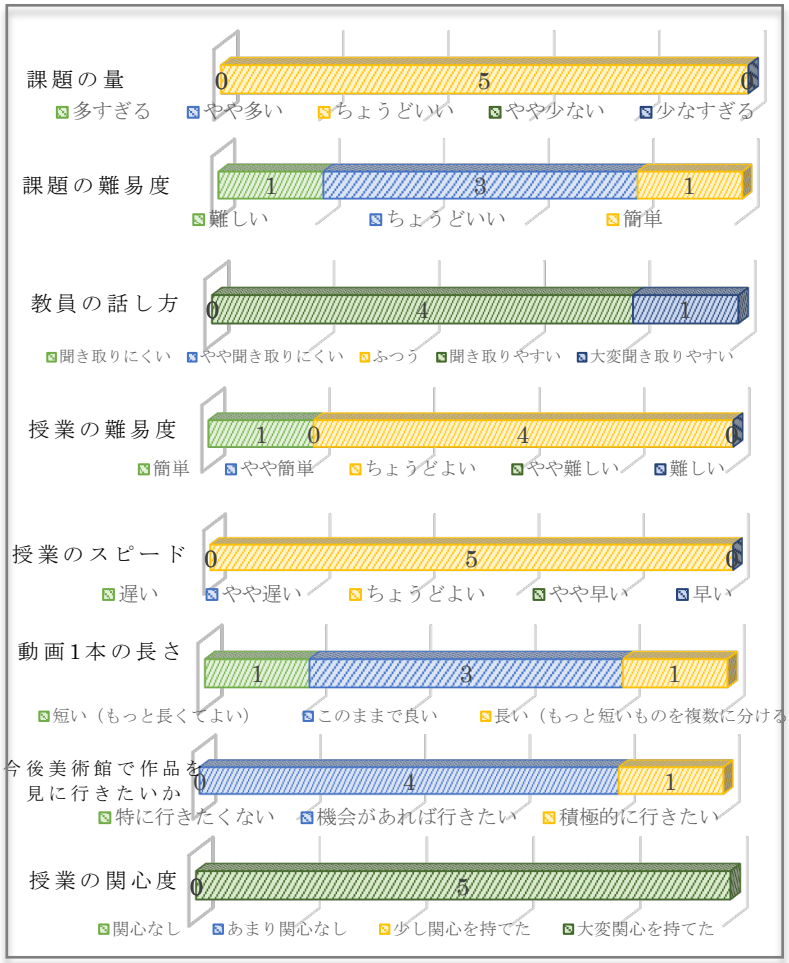
そこで授業内容を大幅に見直し、毎回、各時代の美術の特徴をより捉えやすい作品を選出し、それらに関する質問（なぜ作られたのか、どういった人が見たのか、どこに飾られたのか、どうやって作られたのか、など）を設けて考察させることを課題とした。一つの作例をじっくり見て考察することで、美術作品の歴史的背景を積極的に読み解く力をつけることを狙いとした。

5) 授業方法、形態、内容の概要
本授業は先述した取り組みを踏まえ、毎回①パワーポイントに音声での解説を加えた動画②授業レジュメ③課題作品の画像データ④課題シート⑤前回の課題に対するフィードバックの5点を1セットとして配信した。また最終回の授業では、12問の○×形式のテストをMoodle上にもうけ、最終チェックテストとした。
①動画：対面がかなわない状況下でもできるだけ学生が臨場感をもって視聴できるように、最初の数分間は顔を出して授業の連絡事項などを伝えるようにした。その後、パワーポイントの映像で、前回の課題に対する回答の紹介とコメント、課題作品の特徴を踏まえた上で同時代の作品解説、今回の課題の意図説明を行った。
②授業レジュメ：作品写真を多用する本授業では、ノートを取るだけでは授業に追いつくことが困難であるため、メモを取りやすいように作品写真を中心にパワーポイントを縮小印刷した配布レジュメをPDF形式で準備、配信した。
③課題作品の画像データ：毎回考察の対象とし

た作品写真をできるだけ高精細画像で準備し、配信した。これにより考察の際に細部まで拡大できるようになり、例年よりも細かく観察することが可能になった。
④課題シート：作品写真の縮小白黒画像とともに、自身の考えをまとめて提出してもらった。
⑤フィードバック：前回の課題シートに講師がコメントや、質問に対する回答を書き込み PDF 化したものを、Moodle 上で返却した。

Ⅱ．アンケート結果

アンケートは独自の質問項目で最終授業配信時に実施した。質問は選択式 8 項目と、自由記述式 4 項目で、5 名が回答。集計結果は下の通り。



[授業動画のよかった点・悪かった点]（自由記述）
・動画だからこそ、自分のペースで見返すことができること。分からないところや気になるところをもう一度見ることができる。
・プロジェクターで見るよりは絵画作品がクリアに鑑賞できたと思います。そして、自分がもっとみたいと思ったところを拡大出来るし、ちょっと聞き逃したなって言うところを戻ってもう一度聞ける点が良かったと思います。
・たくさん資料が出てきたのでわかり易かった。授業の内容に入り込めた。
・繰り返し解説が聞ける点、自分のペースで授業を理解できる点
・最初の授業外のコミュニケーションがよかったです。
・一方的に話を聞いているという感じも少ししたので、気持ちの問題ではあるが、対面に比べて集中力を保つことが難しいかもしれないと思った。
[毎回の課題の良かった点・悪かった点]（自由記述）
・良い点や悪い点という所を特にあげる必要ないくらい対面授業と同じようにできた所が良いと思いました。
・毎回別に資料をアップしてくれるので見やすかった。
・自分でよく観察するという作業ができるので頭に残りやすかった。
[授業全体の良かった点・悪かった点・感想]（自由記述）
・コロナウィルスで、授業全てがオンラインになりました。Web のニュースで課題が出されるだけで授業の課題のフィードバックがない、自習等々、大学に行かなければできない学びの場が提供できない事例をみました。私は全ての授業で課題のフィードバックも行われ、ZOOM などを使用して一方通行ではない授業を行うことができたので、不便はなかったです。ただ、やはり他の学生がいないことというのはどうしても無機質に感じてしまう部分もありました。私は 4 回生なのでほとんど授業がないのでストレスも感じませんでしたが、大量の授業が詰まっている 1，2 回生は大変だと思うので少しでも授業を受けているという気持ちになれるように課題のフィードバックがとても大切なのではと感じました。
・もともと西洋美術に興味があったのですが、美術史を大まかに知れたことはとても良かったと思います。キリスト教の影響を強く受けていることが分かりました。また、美術というと絵画のイメージが強かったのですが、彫刻や建築なども美術の中では重要だと言うことを知り奥が深いなと思いました。
・美術史を受講して、改めて美術には多くのジャンルに分類されるほどの歴史の深さや人々の創意工夫を感じることができ、そして耐えることなく現在まで美術の進化が続いていることを実感出来て楽しかったです。特に受講して楽し

かった部分は、ゴシックのステンドグラスの辺りや、ルネサンス付近からそれ以降の辺りが知っている作品も多く、華やかな絵画作品が多くて興味深かったです。
・漠然としか知らなかったことに対して詳しく掘り下げて聞くことができたなと思う授業だった。知らないことをたくさん知れたし内容もとても面白かった。
・なぜそうなのかどうして残ったのかなど知りたいポイントをちゃんと聞けました。すごくワクワクする授業でした。本当は対面での授業がよかったですね。

Ⅲ. 総括

1) アンケート結果を踏まえた、次年度への改善点

今年度は、新型コロナウィルス感染拡大の影響で急遽遠隔授業に対応する必要があったため、手探り状態でオンデマンド形式を始めることとなった。オンデマンド形式は、学生が好きな時間に受講できるメリット（特に実技のある美術教育専攻の学生にとっては、学期途中で対面授業が一部再開されたこともあり、ライブ配信型よりも利便性が高い）がある一方で、一方向の授業に終始してしまいがちである。そこで当初より、思考力を伸ばすための課題と、回答を受けた授業動画内での解説、個別返却のフィードバックに力を入れた。II のアンケートを見る限り、こうしたフィードバックは学生の意欲を高め、双方向に近い感覚で授業を受けられたようであった。また最終チェックテストの初回正答率は例年よりも高く、作品について思考する課題を毎回設けたことで、各時代の美術の特色を抑えやすくなったと考えられる。

次年度以降への改善点としては、①動画作成スケジュール管理と、②課題の取り組み方へのフォローがあげられる。①については、課題の提出期限までに 5 日間の余裕を持たせた結果、実質 2 日で学生の回答を踏まえた上での解説動画を作成することになり、毎回のパワーポイント作成・動画撮影と編集・アップロード作業のスケジュールがかなりタイトであった。特に在宅勤務期間中は自宅アップロード回線が貧弱で 1 本の動画をアップロードするのに一晩かかるため、動画公開が授業開始時間までに間に合わないこともあった。編集作業に慣れると動画作成時間は徐々に短縮されたものの、オンデマンド動画をメインとした遠隔授業において十分な速度のアップロード回線確保は必須であり、大学の施設が使えない期間は在宅リモートワーク環境の充実のために、何らかのサポートが必要であろう。②については、遠隔授業であるが故に、個別のフィードバック対応がより必要な事項である。作品について十分に考察してもらうため、毎回課題の意図や考えるポイントを動画内で説明していたが、それでも西洋美術に初めて接する学生にとっては、何を回答していいか戸惑ったようで、初回〜5 回目くらいまで短文で結論だけを書こうとする回答が散見された（例：Q この作品はどこに飾られてどういう人がどのように見ていたのでしょうか→A「家の中」）。そこで、回答が合っているかが重要ではないこと、美術作品のどこを見て当時の作品の様子を推測したのか、観察し考察する過程が重要であることを毎回のフィードバックでコメントし続けたところ、途中から作品のどこを見て考えたのか具体的な根拠を添えるようになっていった（例：作品中の男女が豪華な衣装を身にまとい楽しそうなのが伝わるので、同じくらいの身分の人がプライベートな空間に飾って楽しんだ）。通常の対面授業であれば、まわりの学生と相談しながら考察してもらうこともあり、自分の回答の姿勢と周りの受講生との違いに気づきがちであるが、遠隔授業では一人で思考・回答・提出するため、なかなか自分の回答の不十分さに気づくことができない。フィードバックコメントといった個別対応に加え、動画内で定期的に注意を促すようにしたが、次年度以降は、課題をワークシート形式にして思考の段階をチャート式で書くようにするなど課題シートでも工夫をしていきたい。

2) 授業の目的、到達目標、関連 DP を踏まえた総括

アンケートおよび課題へ取り組み方や最終チェックテストの正答率から、授業の目的や関連 DP の（知識・理解）（思考・判断・表現）はほぼ達成できていると考える。特に作品写真をじっくり見て思考する楽しさに気づき、美術作品への関心を高められた学生は多かった。今後も作品について思考する機会を設定し、学生が自らの力で美術作品の楽しみを見つけられるような取り組みを考えたい。